

2 回間 I・II式再論

はじめに

西上免古墳からは10地点で土器集積が確認でき、全体では105点の土器を識別することができた。そこでここではこれらの土器が、編年的にどのような位置づけになるのかをやや詳細に検討していくことにしたい。そのためには回間 I式から II式期の土器組列を今一度再検討する必要がある。なぜならば回間様式の設定*は西春日井郡清洲町回間遺跡のみにおいて実施したものであり、濃尾平野全体に対しては本格的な検証はほとんど行っていないからである。

回間 I式・II式期

回間様式の提唱は『回間遺跡』の報告書の中で具体的に行なった。それは回間様式を3つに区分し、回間 I式・II式・III式期としてそれぞれを4段階に区分するものであった。その後、回間遺跡SB02段階を回間 I式期の最古段階に位置づけることとし、あらためて回間 I式0段階を設定した**。これによって山中様式と回間様式の間が一応充填されたものと考えている。また回間 I式0段階をもって古墳時代と考える点は変更していない。つまり軽量薄甕の登場・共鳴をもって古墳時代を画するというものである。当面の時代区分を墳丘墓や土器様式の総合的な画期に置くのではなく、S字甕や庄内甕といった時代を明確に表現する軽量薄甕の共鳴現象という点に象徴させた。そしてそこに政治性を読みとろうと考えた***。回間 I式0段階の良好な資料は現在の所、八王子遺跡SK73をもって代表させたい。高杯は3という直線的な形状を持つものが客体として残存し、その他の内彎志向を所有する形態が主体を占める。透孔は脚部中央より上位に穿つ点は、山中式5段階の資料と異なる。台付甕は11、12、13、18の有段口縁台付甕が主体を占め、その中に14のS字甕0類・多種のく字台付甕が登場する点が特徴である（甕の多様化）。器台は東海系器台****であるが、27、28の中空器台が残存する場合もあるようだ。7の内彎土器は山中式後期から回間 I式前半期に普遍的に見られる型式。

さてここでは以上の経緯を踏まえて、回間 I・II式期の具体的な内容を提示したいが、その具体的な型式組列を個々に詳細に言及することは避け、編年表の提示によってその任を果たしたい。回間 I式期は回間遺跡 SB02、SB75 及び SB30、回間遺跡 SB10 及び SZ04、回間遺跡 SB03 及び SB29、回間遺跡 SK50 等の資料を基本にしてそれぞれ0・1・2・3・4段階を設定した経緯がある。この点は基本的には現在も変更はない。そして回間 II式期は回間遺跡 SB59 を1段階とし、回間遺跡 SZ02 を2段階の標識資料と考えた。さらに回間遺跡 SB60 を3

八王子遺跡
回間 I式
0段階

*赤塚次郎1990「回間式土器」「回間遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

**赤塚次郎1992「回間 I式覚書92」「庄内式土器研究 I」庄内式土器研究会

***赤塚次郎1996「前方後方墳の定着」『考古学研究』第43巻第2号

****赤塚次郎1993「東海系器台覚書」「庄内式土器研究 IV」庄内式土器研究会

段階、廻間遺跡SK30を4段階の資料としたが、2・3段階以外の資料は器種的に限られたものであり、他の遺跡に良好な一括資料が不足していたためやや不鮮明な部分もあった。その後、廻間II式期の資料が濃尾平野にて急増し、例えば堀之内花ノ木遺跡や北道手遺跡、あるいは朝日遺跡などで補足的な見解が指摘されてきている。こうした遺跡の内容を基礎にして特に廻間II式期の細分を再考したい。廻間遺跡報告書以降でやや異なる点は、おそらく二重口縁壺の評価であろう。廻間遺跡では二重口縁壺が廻間II式期に明確に遡る共伴資料は見いだせなかつたが、他の遺跡では共伴関係が多く見いだせる。まずは二重口縁壺自体の型式区分が必要である。さらに二重口縁壺と加飾壺の関係は、墳丘墓での使用を加味することによって興味深い展開が今後に予想されるであろう。

濃尾平野内に表面化する諸型式

海部・中島郡 濃尾平野における様式的な問題の中で大変興味深いのは、廻間様式の受容そのものの有無についてであろう。つまり廻間I式初頭・前半期の土器様式が、普遍的に分布する地域は極限定される。それは濃尾平野低地部である、海部・中島郡を基本にするのであり、それは本来の廻間様式圏でもあった。ではその周辺部ではどのようなものかは未だに不明確と言わざるをえない。しかしながら例えば中濃地域や犬山扇状地では廻間様式とは異なる土器様式が、山中様式併行期から連続しているようである。一方で伊勢湾沿岸部では積極的に廻間様式の受容が行われていくことは明らかである。海に面した地域こそいち早く新しき土器様式を受け入れ独自の文化を育んで行く地域である。そして廻間I式期中頃を境にして次第に廻間様式の浸透が扇状地部や山間部に見られるようになり、こうした動向を背景にして廻間I式0段階に誕生したS字甕が、ようやく濃尾平野全体に広く分布するようになる。

廻間II式期の小地域的な様相は未だに不明瞭であるが、濃尾平野低地部以外には独自の型式的な変遷を志向する傾向が強くなるように思われる。いずれにしろ廻間I・II式期において、明確な形態的特徴とその変化が容易に推察できるのは有段高杯である。廻間様式の有段高杯の最大の特徴はやはり内彎志向であろう。ところがこうした特徴的な内彎志向を有しない高杯とその変遷を見いだす地域がある。犬山扇状地・中濃地域を含めた濃尾平野北部・山間部に顕著に見いだせる。図10は春日井市の勝川遺跡の墳丘墓出土資料であるが、有段高杯の形態のみが濃尾平野と著しく異なる形態を持ち、おそらくその変化の方向も独自のものが予想される。また図9は大垣市今宿遺跡の資料であるが、高杯の全体の形状は濃尾平野低地部と大きく異なる点は見られないものの、杯部内面に多条沈線文が多用されるといった特徴的な高杯が普遍的かつ主体的に存在する。したがってこれらの有段高杯を西濃型高杯と呼称することができよう。そこで改めて西濃型高杯の特徴をまとめておくと、まず脚部内彎志向であるが、基本的には同調するものと考えたい。最も顕著な特徴が杯部内面の多条沈線文である。また加えて杯部底面に僅かな段を有する点も含めて良いものと考える。因みに廻間II式期の杯部と脚部の大きさにおいて、比較的杯部が小さく浅くなる傾向が見いだせるようである。西濃型と呼んだ有段高杯が多く分布する地域は、現状では美濃安八郡から尾張葉栗郡の濃尾平野低地部北部地域に見いだせる。こうした有段高杯の他に鉢・内彎口頸壺の中に口頸部あるいは口縁部を著しく大きく・長くした形態を有するものがある。この形態が散見

西濃型高杯

できる地域は犬山扇状地周辺を含めた濃尾平野北部に点在する。こうした特徴を詳細に検討できる遺跡の調査が進めばやがて系列的な型式群のまとまりが導き出されることになろうが、それには今しばらく時間がかかるようである。大きくは濃尾平野低地部（尾張南部・西濃）と扇状地部・山麓部（中濃・尾張北東部）といった地域差が存在し、前者が後者に影響を与え続けるといった基本的な構造が読みとれる。

技法論の手がかり

廻間Ⅱ式期を中心とした技法の問題をまとめておきたい。問題を以下の2点にしほることにしよう。まずS字甕の調整法について、第2にミガキ手法についてである。なお加飾技法であるが、廻間Ⅱ式前半期には加飾性の高い土器が散見できる点はすでに指摘しておいた。有段高杯・有稜低脚高杯、さらに各種の壺に多用な加飾が施される。主にヨコ方向の沈線文、貝殻・板状工具による刺突文や波線文・弧状文が目立つ。パレス壺の装飾性においては体部に幅広凸帯を付加させたり、口縁部内面の刺突文や体部の赤彩波線文が急速に大きく拡大する傾向が基調にある。

S字甕の変遷を基に内外面の調整法の変化をまとめてみたものが表2である。ここでは手順を技法論の根幹においているためその手順の変化を中心に考えてみた。まずS字甕の誕生を考える上で最も重要な0類であるが、基本的には内外面ハケ調整で、体部外面は単斜方向のハケを施し、その施文法は頸部から口縁部に及び一貫している。内面の調整も斜めハケによって頸部から体部全体を調整する。そこにナデ調整が加わった形跡は見られない。口縁部にはヨコナデが施される。次のA類になると外側の調整が独立した羽状調整法に変化し、体部外面調整が2分

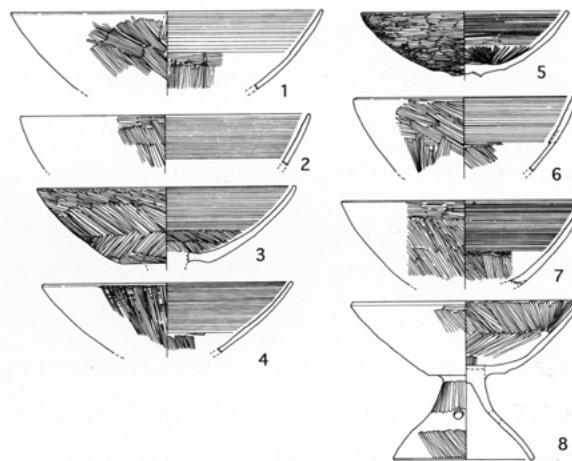
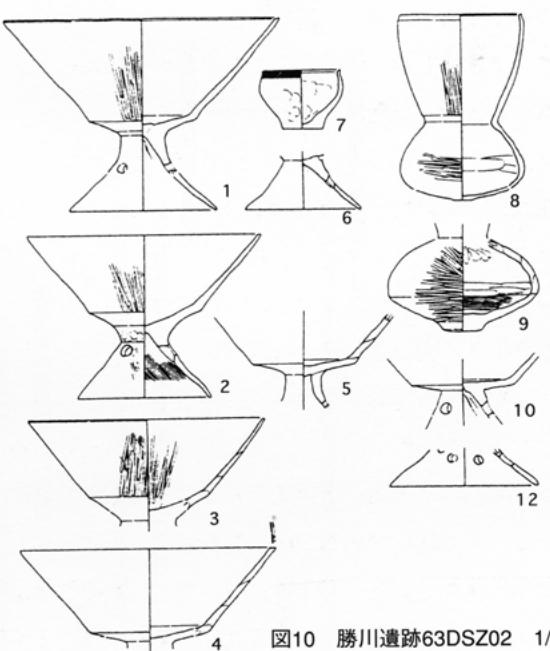


図9 今宿遺跡出土高杯 1/8
中井正幸1994「今宿遺跡」『大垣市埋蔵文化財調査概要』より



樋上昇編1992『勝川遺跡IV』
愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集

され頸部からと体部下位からの動作に統一される。その普遍化はA類新段階にある。頸部はハケ調整のち工具ナデ調整に規格化され、よりシャープな印象を与えるS字甕独特の複雑な屈折口縁が普遍化する。内面調整はしだいに体部調整と口頸・口縁調整がそれぞれ独立し、体部内面はハケ調整のちヘラ（板）ナデ・指ナデ調整が手順に加わることになる。そのためには頸部内面の調整は独立した不規則なハケ調整を2次的に行うといった手順に変化する。A類内面調整の省略 新段階にはすでに内面ハケ調整がほとんど見られないまでに丁寧にナデ調整を施すようになっていた。そしてB類古段階になると外面調整は規格化された羽状調整法が定着し、以降D類のヨコハケの省略まで基本的な調整法の変化はほとんど認められない。完成された姿を見せる。その変わりに内面調整は大きく変化することになる。つまり手順の省略である。顕著に現れるのが内面調整におけるハケのちナデといった手順の崩壊である。すなわちハケ調整の省略であり、ナデ調整のみによる手順に変化する。特にタテ方向の長い指頭ナデによる手法が散見できるようになる。必然的に内面の整形用の指頭圧痕の凹凸が表面化する。頸部内面の調整はますます独立したハケ調整の様相を呈し、やがてB類新段階では形骸化しハケあるいはヘラ状工具をヨコへ動作する程度の行為となる。以上、おおまかにS字甕の調整法の確立とその崩壊を見てきたが、こうした技法の変遷と体部と口縁部に象徴される形態の変化を組み合わせる事により、S字甕のみによって編年的な位置づけが容易になる。さらに第IV章2節にて言及したように混和材の問題と絡めてS字甕の規格性の強さが改めて浮き彫りにされることになる。つまり前記したような有段高杯に象徴されるような、地域的な微細な変化が存在するにも関わらず、S字甕はこうした小地域性をほとんど無視するように分布するのである。まさに地域を超越した存在であり、微細な変化を無視することができるほどに規格化された甕がS字甕といえよう。

羽状ミガキ

表2 S字甕内外面調整技法の変化

S字甕 0類		外面調整 単斜方向 ハケ	内面調整 連続 ナナメハケ
S字甕 A類	古段階		体部ハケ調整 独立頸部 ハケ調整
	中段階	羽状方向 ハケ	
	新段階		ナデ 指ナデ
S字甕 B類	古段階	独立 ヨコハケ*	
	中段階		頸部 ヘラ
	新段階		

* 独立ヨコハケとは頸部から完全に分離し、あらためてヨコハケを体部上半下位付近に施すもの。

ミガキ手法についてはここでは特に西上免遺跡で表面化した羽状ミガキ技法についてまとめたい。西上免古墳出土高杯に明確な羽状方向のミガキが認められた。高杯杯部内面や外面、そして脚部外面に見いだせる。この傾向は廻間I式期に遡る資料には見られず、廻間II式期から散見できるようである。地域的には西上免遺跡や北道手遺跡といった葉栗郡（中島郡北部）の遺跡に散見できるようである。さらに大垣市今宿遺跡の西濃型高杯の中に杯部外面や内面に羽状ミガキが認められる（図9-3.8）。一方で、朝日遺跡や

廻間遺跡ではほとんど見いだせない。なお西上免遺跡では小型壺の外面にも羽状ミガキが施されたものがある。どうやら上記した西濃型高杯が主体的に分布する地域と重複する可能性が高い。今後の資料の増加が必要であるが、葉栗郡から西濃地域に主に散見できる。

西上免古墳出土土器について

さてここで西上免古墳出土土器について、各地点別土器群を基本にした組列を考えてみたものが図11である。この中で特に注目したいものが、有段高杯の形態的な特徴とその変化である。層位的な問題を加味しても明らかに高杯の杯部の変化にその変遷の特色を見ることができよう。つまり杯部口径に対する深さの比率が徐々に低下する傾向が確認できる。これは廻間I式3段階において最もその比率が拡大し、その後は急速に比率を低下させるという基本的なあり方を反映しているものと思われる。西上免古墳出土土器全体としては、脚部の内彎志向は低調であり、やはり廻間II式期の脚部の特徴を表しているといえよう。脚部と杯部の高さの比率は、廻間I式期から一貫して徐々に低下する傾向が見られ、廻間I式4段階になると脚部が形状を圧縮させるように変化する。そして廻間II式期は基本的に杯部と脚部の比率は1/1と固定する。廻間II式後半期以降は脚部内彎志向はほとんど形骸化して、3段階になると逆に大きく外反する杯部・脚部が出現する。西上免古墳出土土器にはこうした特徴をもつ有段高杯は認められず、したがってこの点からも廻間II式前半期を中心とした土器群であることが分かる。なお問題は197の高杯である。杯部内面に多条沈線文を施し、杯内面底部に段を有する西濃型高杯である。従来の見解では例えば廻間遺跡SU03の高杯をもって廻間II式の最古段階の高杯と認識していた。こうした点からは明らかに197の資料は廻間II式1段階に含めて考える必要があるが、共伴関係からはI式期に含めることが許されよう。あるいは杯部の深さ低下が急速な西濃型高杯の特徴かもしれない。最終的な判断には今少し類例が必要である。いずれにしろ廻間I式4段階とII式1段階の中間的な様相を持つ資料である点は重要である。

有段高杯

S字甕について、A類新段階からB類中段階の資料が出土している。そのためA類からB類への変化の過程を具体的に検証することができる良好な資料群といえよう。まず地点別にS字甕を観察してみると、SD25第3層出土のS字甕であるH地点出土品は全て口縁部に刺突文が施されたS字甕であり、体部の形態はやや球形を呈する資料が見られる。外面の調整は独立した羽状ハケであり、内面の調整はハケを施し、頸部内面の調整は独立した不規則なハケである。S字甕A類の体部形態は長胴形から球形への基本的な変化が見られるのであり、こうして点からもH地点のS字甕A類は新段階に含めて考えることができる。F地点のS字甕はA・B類が共伴するが、体部の形態がさらに球形を呈し、内面調整はハケをナデ消すような調整法が見られる。G地点になるとB類の資料に限定され、体部の形態は球形を呈し、内面調整はハケのち指頭ナデによって完全にハケ調整が見られなくなる。内面には凹凸が全く見られない丁寧な調整である。ところで頸部と体部最大径の比率を見てみると、頸部径が比較的小さいといった特徴が見られる。S字甕B類の最古段階の資料はこうした頸部径の比較的小さいものが見られ、その後は頸部径が大きくなり、体部最大径の体部上位への移行といった形態の変遷が考えられる。K地点のS字甕は典型的なS字甕B類の形状を留めたもので、体

S字甕

部の形態は最大径を体部上位に置き、内面調整はナデ調整によって統一され、頸部内のハケは独立した単独の不規則なハケとなる。口縁部は鋭い工具調整により鋭利な屈曲を見せ、口縁端部は明確な面を有する。なお台部については、F地点以降に明確な折り返しが見られるようになり、K地点に至っては台部の形状が接合部から底部に向かってやや開く。この傾向はS字甕C類になり最も顕著になる。

パレス壺

パレス壺であるが、H地点第5層出土のパレス壺の口頸部は内部の文様面が口縁部に対し平行になる形態であり、廻間I式期でも前半に位置づけられる資料の特徴をみせる。H地点のパレス壺の口頸部とB地点ならびにC地点のパレス壺の口頸部を比べると、特に内面の文様面の内彎と口縁部の形態において、前者より後者がより著しくなっている点を指摘することができよう。体部の赤彩波線文はB・C地点とK地点を比べてみると、前者より後者がより大きく表現されていることが分かる。こうした傾向は廻間II式期のパレス壺に共通するものであり、全体として廻間II式前半期の特徴をもつものである。

編年表に使用した実測図は、基本的には各報告書掲載資料から転載したものである。

分類は『廻間遺跡』報告書に準拠した。

低脚高杯の分類は原田論文（原田幹1995「東海系小型高杯考」『考古学フォーラム7』）を参考にした。

八王子遺跡は一宮市大和町刈安賀に所在する遺跡で、SK73は95A b区SD60に掘削された土坑状の落ち込み一括資料である（樋上昇ほか1996「八王子遺跡」『年報平成7年度』愛知県埋蔵文化財センター）。

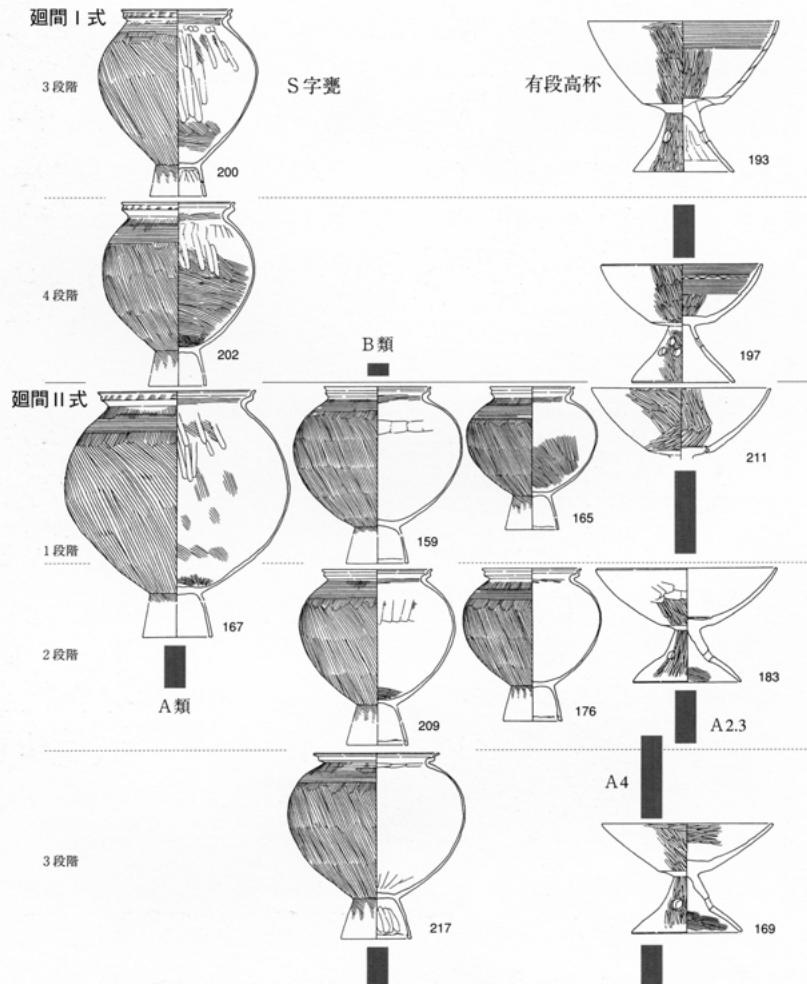


図11 西上免遺跡のS字甕・高杯の変遷 1/10

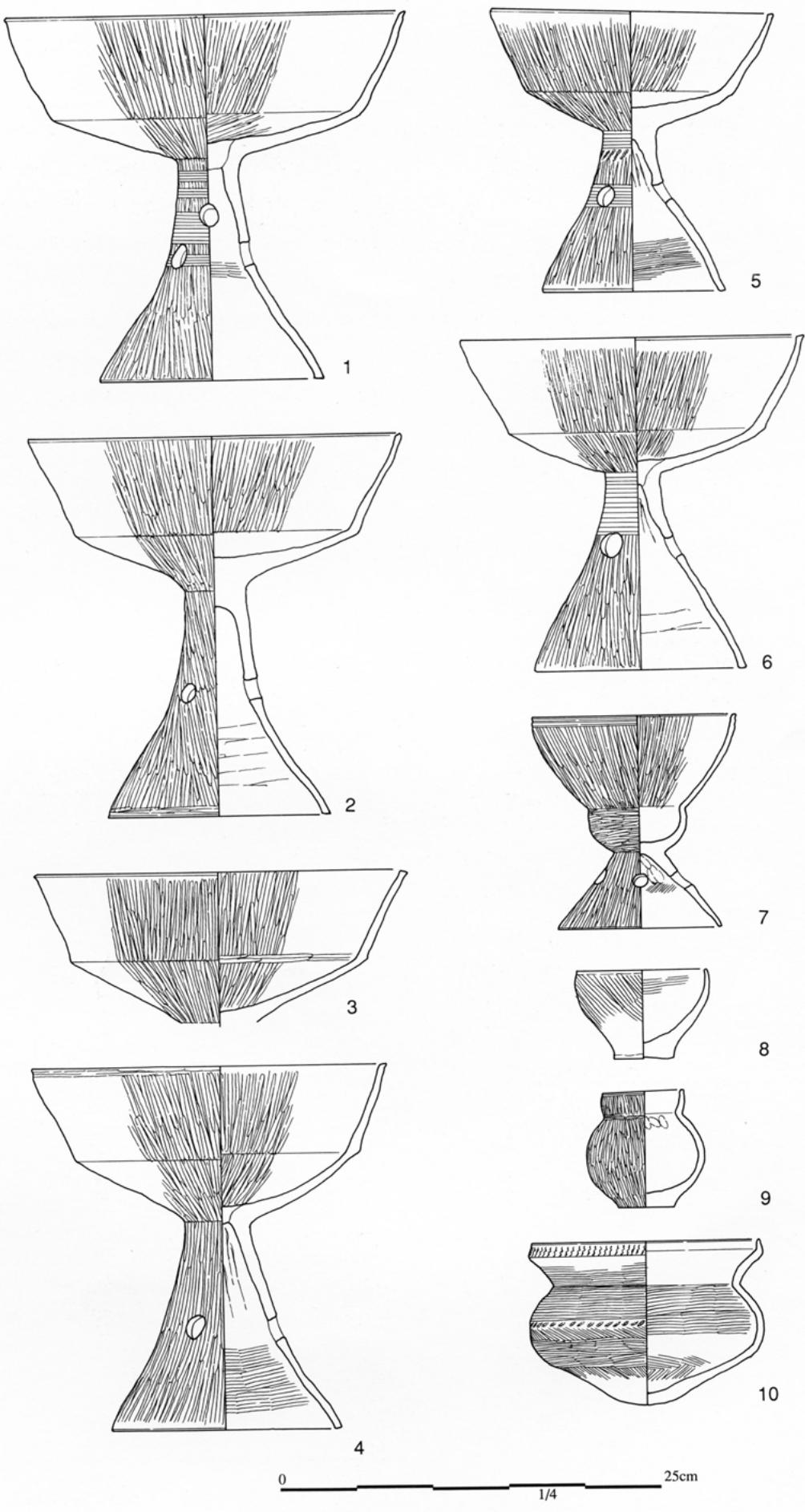


図12 回間I式0段階（八王子遺跡SK73）有段高杯ほか

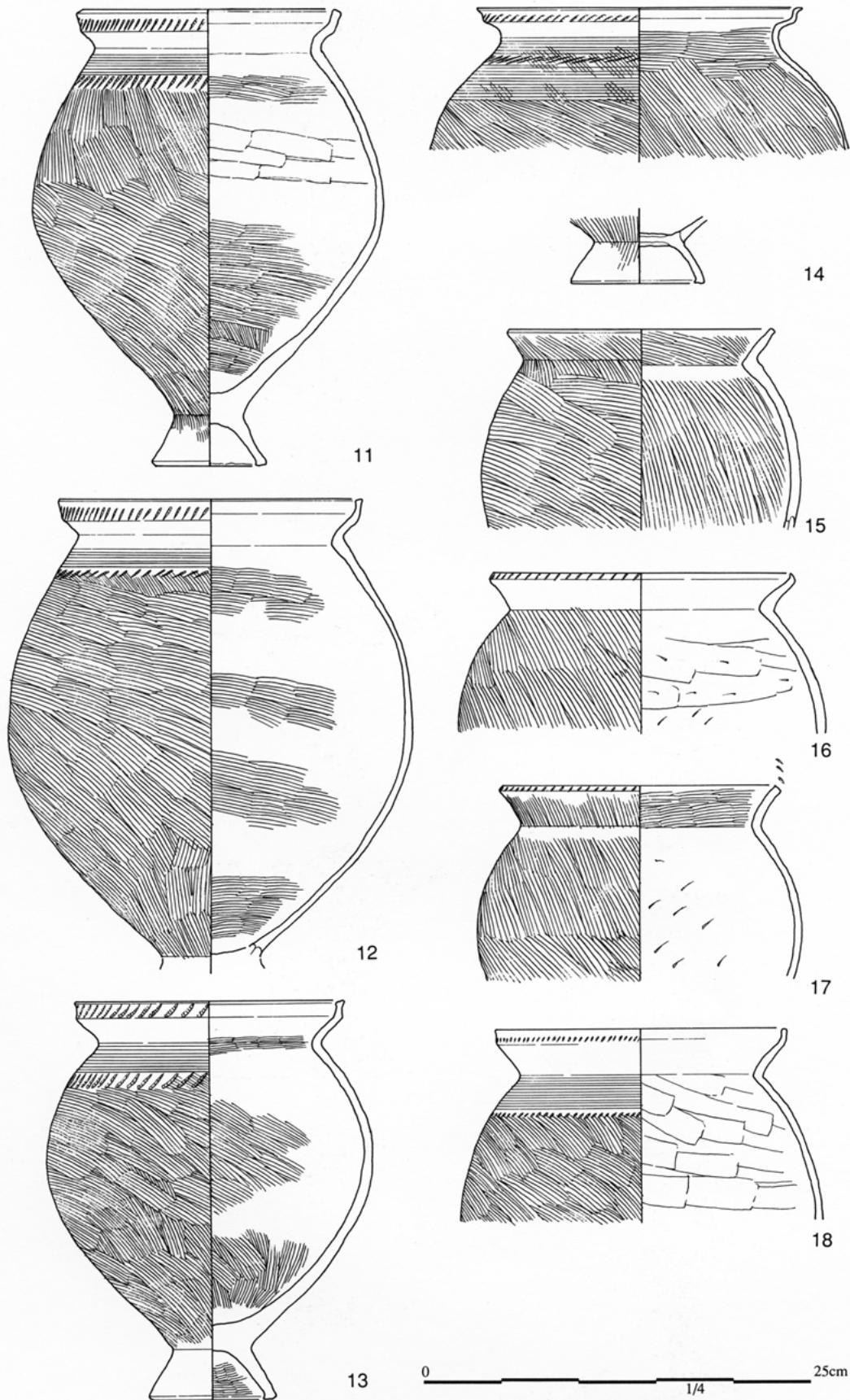


図13 回間Ⅰ式0段階（八王子遺跡SK73）台付甕

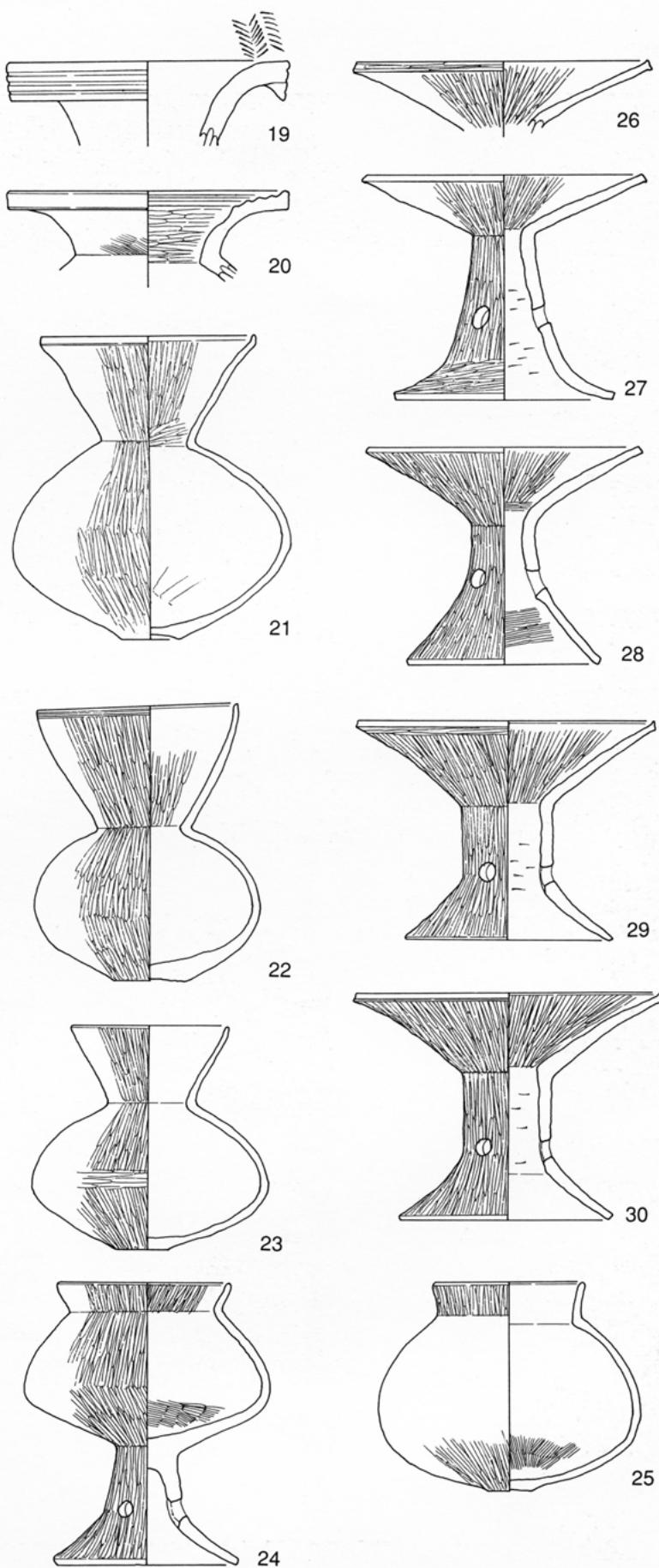
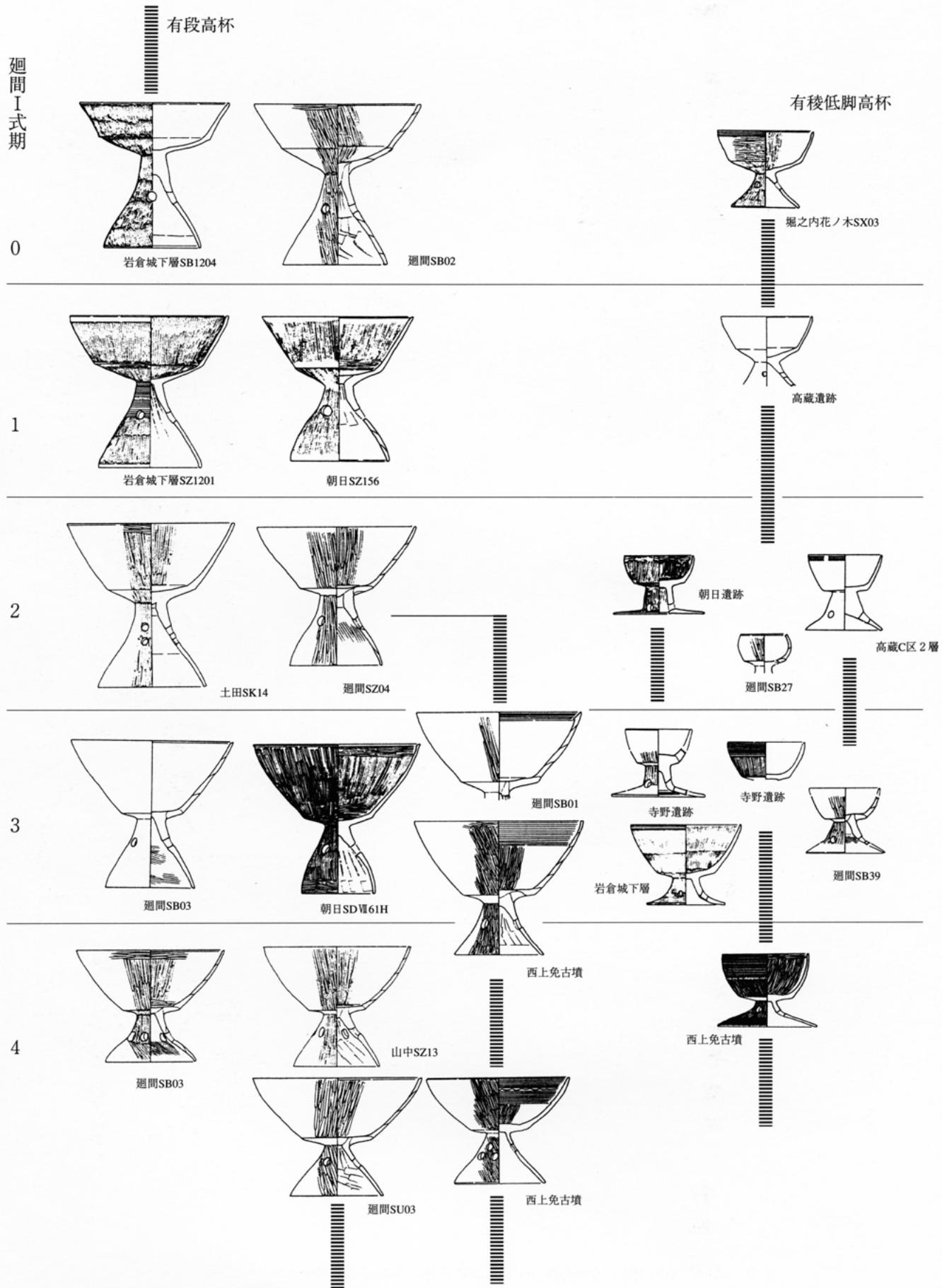


図14 廻間Ⅰ式0段階（八王子遺跡SK73）壺・器台

廻間 I 式期

西上免遺跡



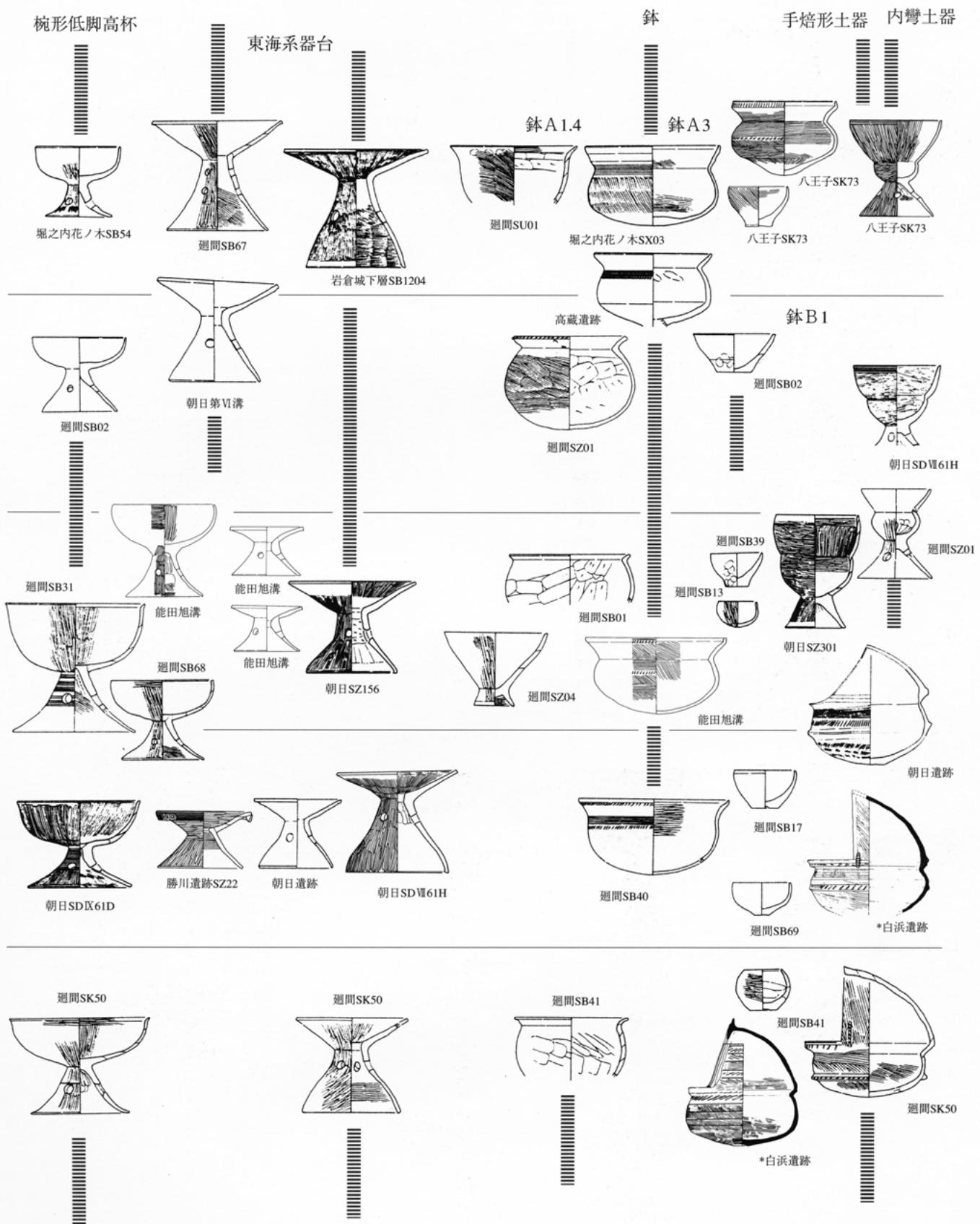
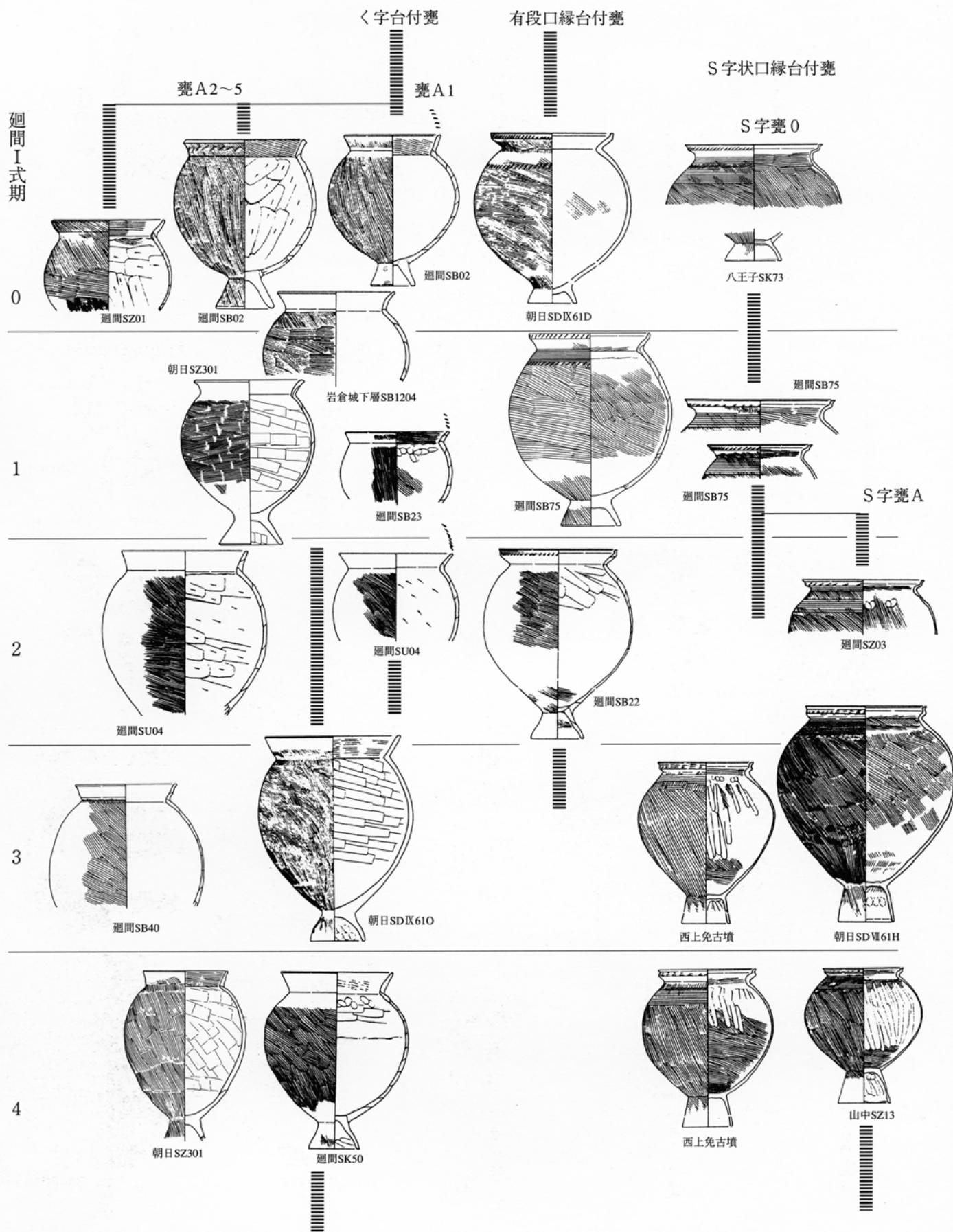


図15 回間Ⅰ式編年表（1/8）器種分類は『回間遺跡』に基づく *は参考資料

廻間 I 式期



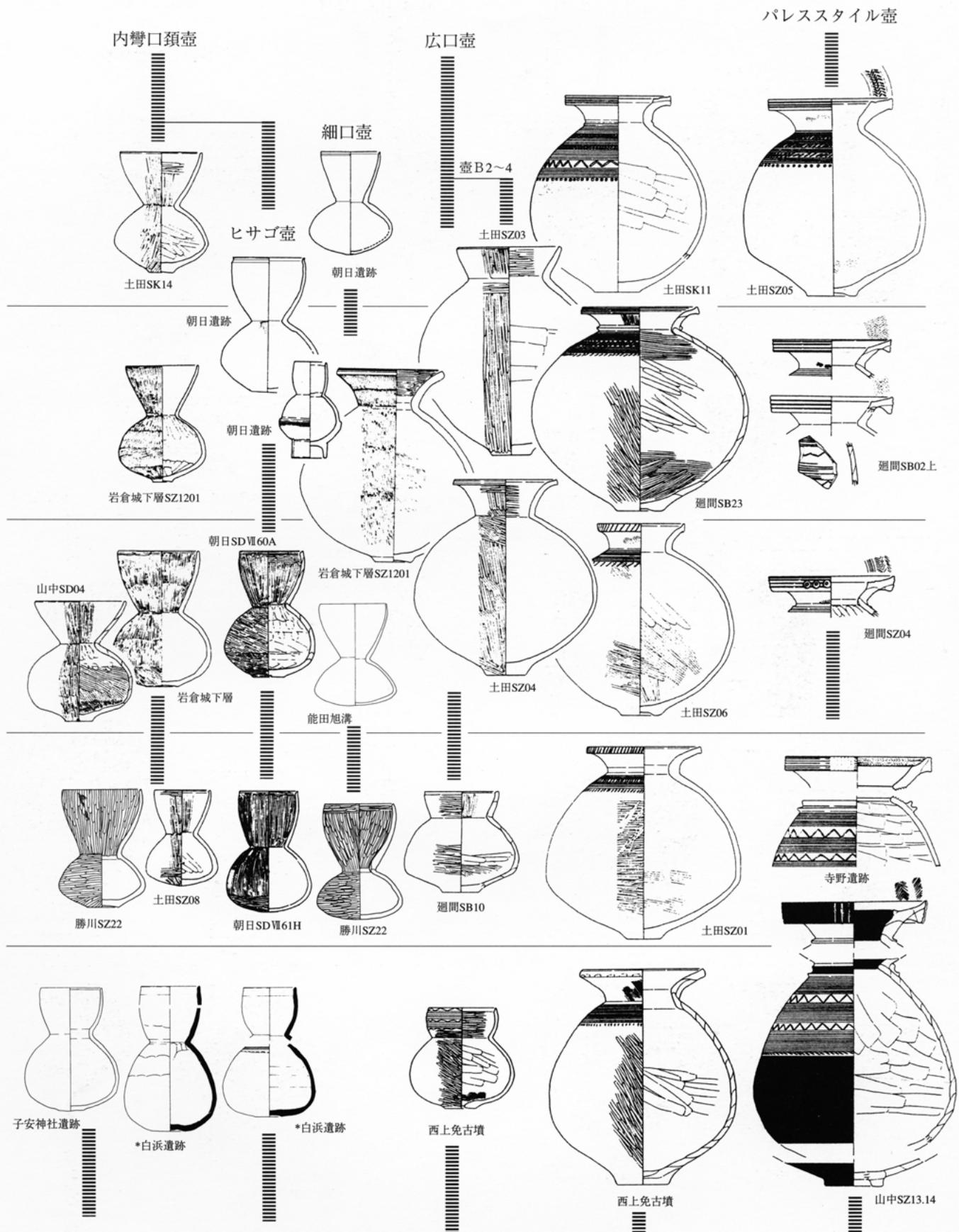
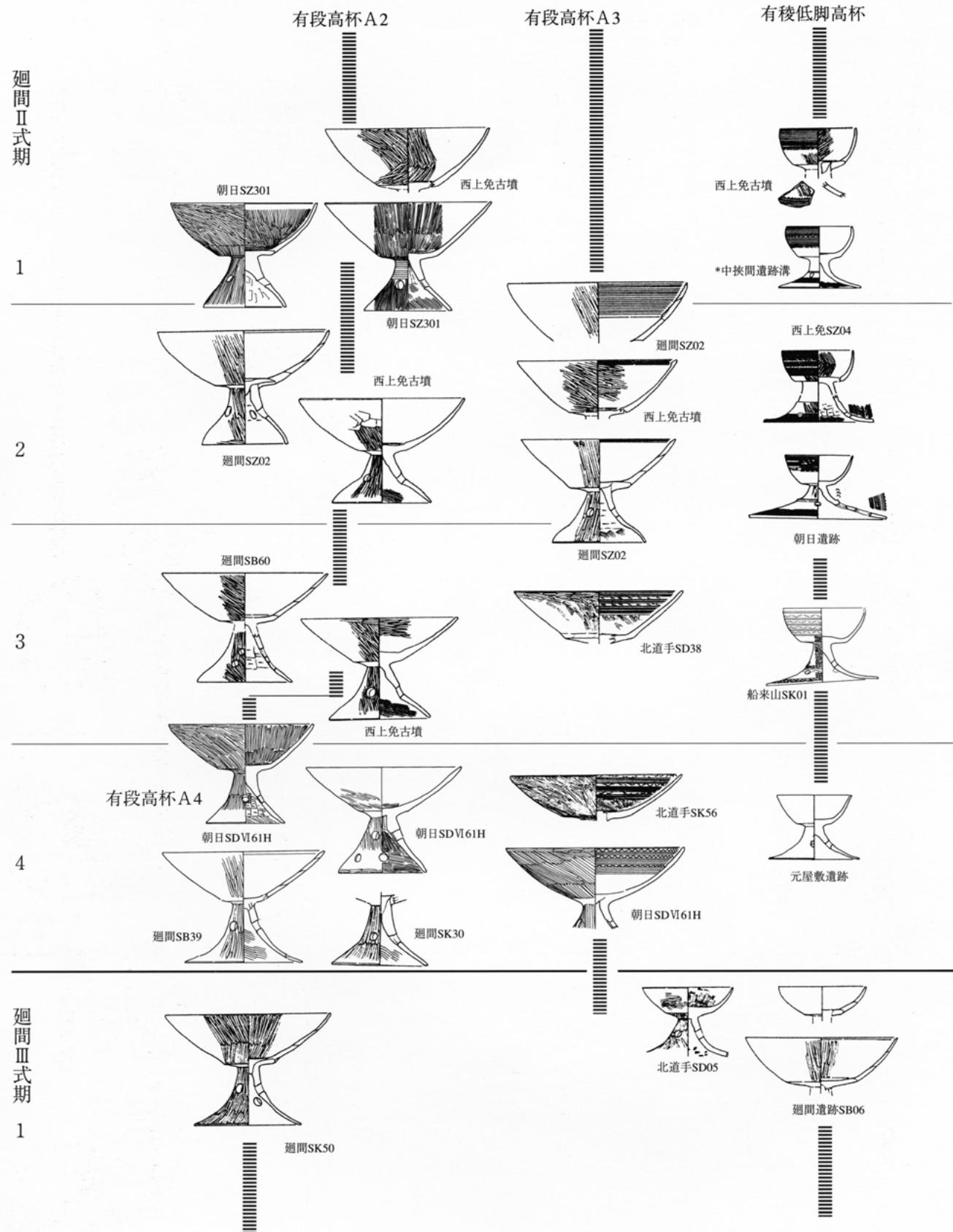


図16 遷間Ⅰ式編年表 (1/8)

西上免遺跡



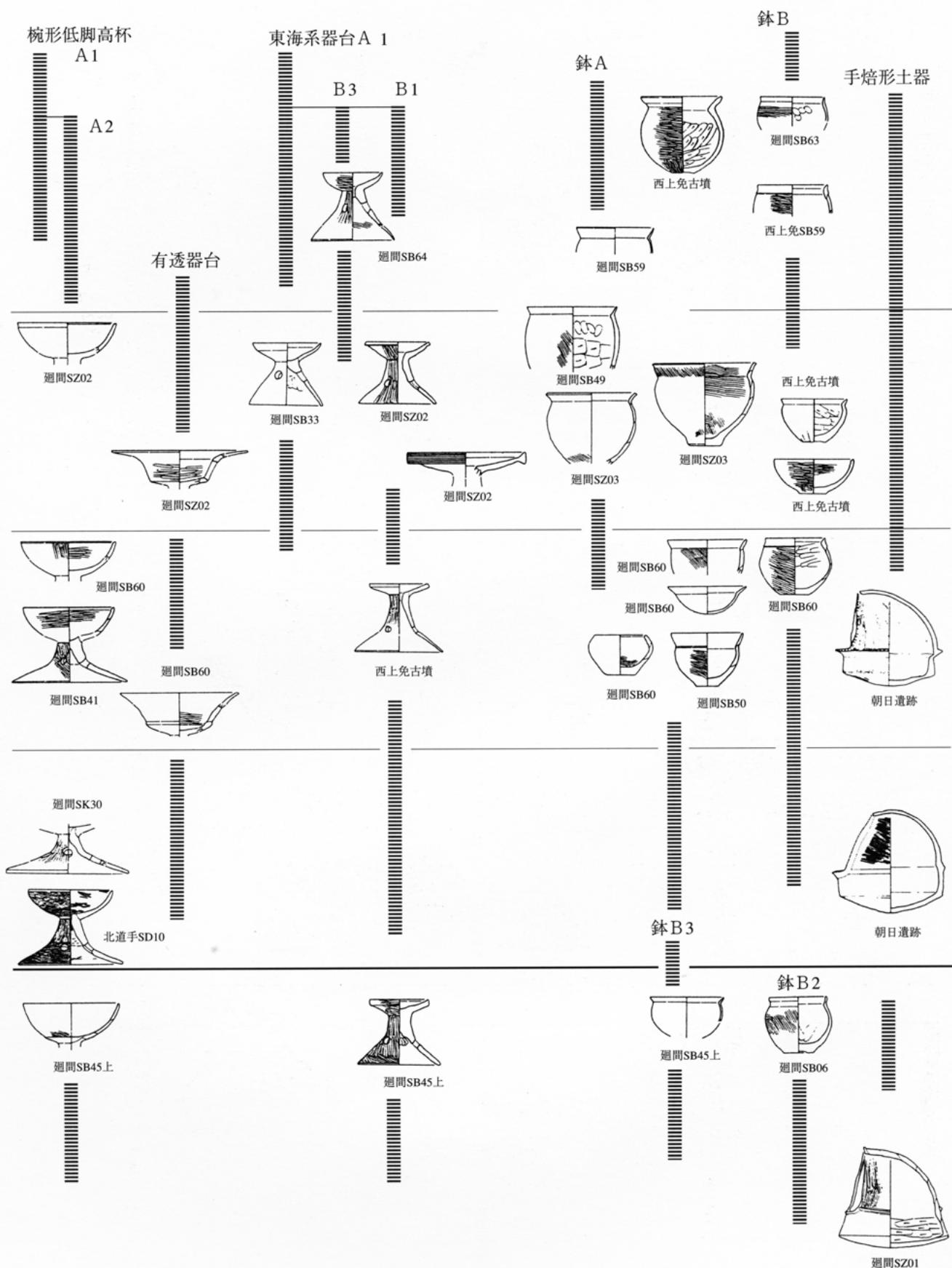


図17 堀間II式編年表 (1/8)

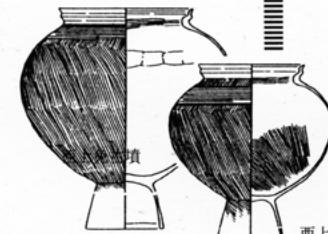
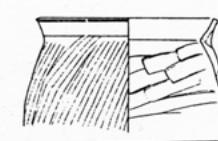
廻間Ⅱ式期

1

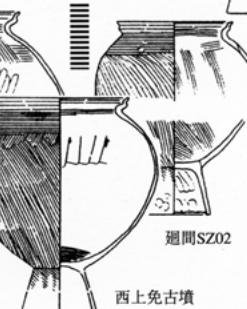
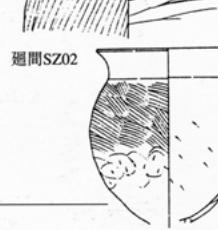
く字台付甕

S字甕B

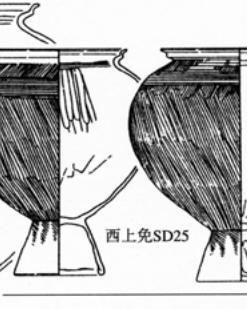
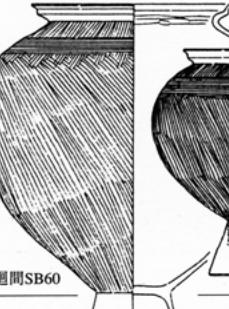
S字甕A



2



3



4

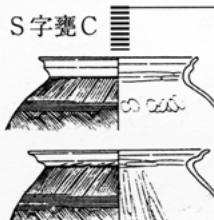
堀之内花ノ木SK160

廻間SK30

廻間SK30

廻間Ⅲ式期

1



廻間SB06
廻間SB06

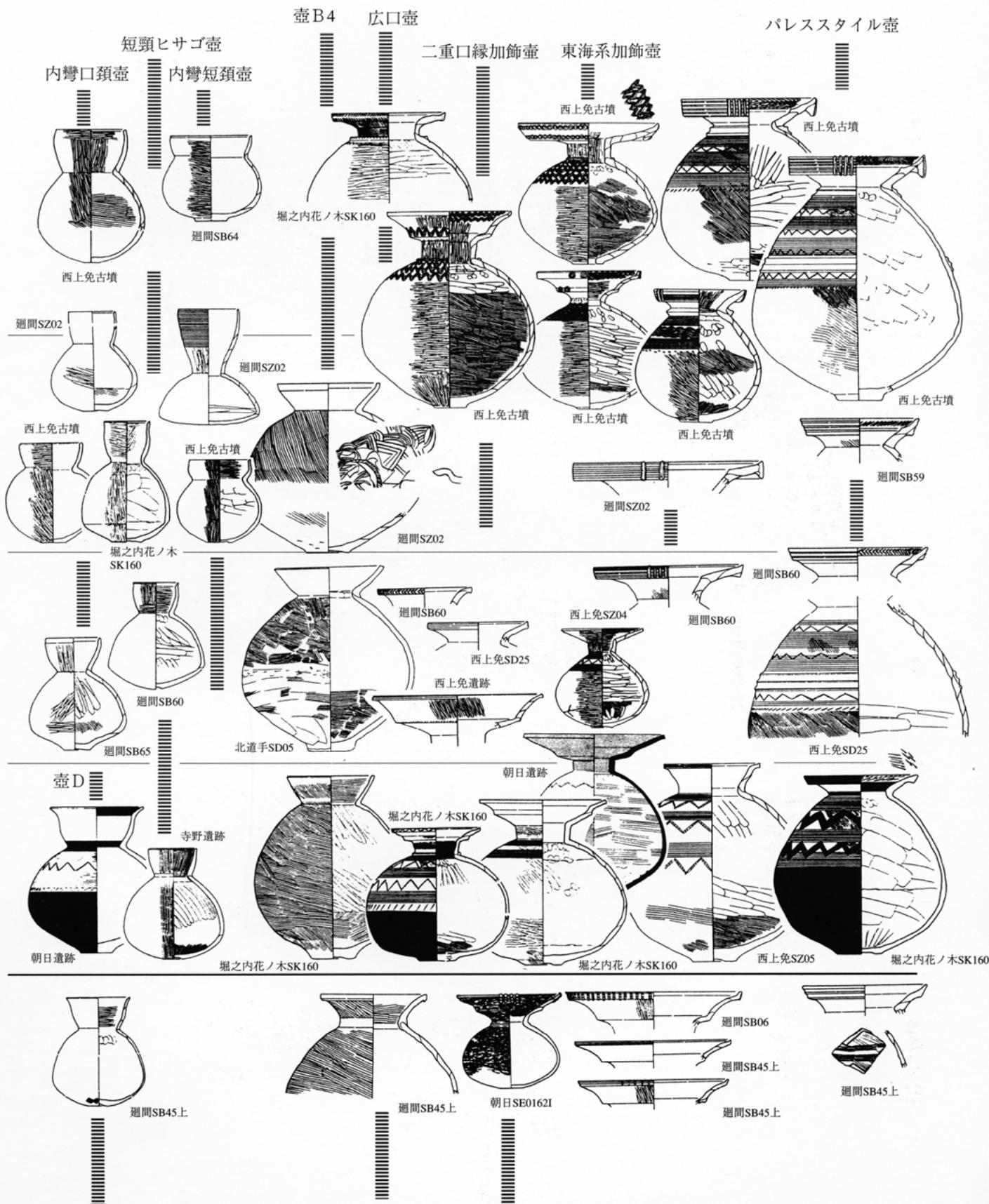


図18 廻間II式編年表 (1/8)